

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H22.9.14)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千トン)

項目	21年度			22年度		
	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	40 (1)	51 (1)	54 (2)	58 (1)	50 (1)	50 (1)
規格	375 (99)	417 (116)	414 (115)	436 (137)	450 (139)	460 (139)
合計	415 (100)	468 (117)	468 (117)	494 (138)	500 (140)	510 (140)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 1Qの切断量(実績)は、前年比13.5%増の494千トン(前回の想定値は470千トン)と7期ぶりに前年同期を上回った。

■ 22年度2Q(想定)は、ほぼ前期並みの500千トン程度(前期比+1.2%、前年比+20.5%)と想定。

・ 7月180千トン(前年同月比+26.1%) + 8月速報160千トン(同+26.0%) + 9月想定160千トン(同+25.9%) ÷ 500千トン

・ 19年度2Q: 612千トン      20年度2Q: 653千トン

■ 22年度3Q(想定)は、510千トン程度(前期比+2.0%、前年比+9.0%)と想定。

・ 1~8月の月平均切断量: 約17万トン×3カ月

・ 19年度3Q: 645千トン      20年度3Q: 624千トン

■ 以上の結果、22暦年計は、1972千トンとなり、前年(2087千トン)比▲5.5%。また、直近ピークの18暦年(3976千トン)比では▲50.4%と半減。

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q: +6.3%、 2Q: +6.6%、 3Q: ▲3.3%、 4Q: ▲24.8%

21年度1Q: ▲34.1%、 2Q: ▲37.9%、 3Q: ▲25.0%、 4Q: ▲4.0%

22年度1Q: +13.5%、 2Q(想定): +20.5%、 3Q(想定): +9.0%

## 2. 業況

厚板シャー業界を取り巻く状況を概観すると、建産機関連需要は、機種によりまだら模様を呈しつつ、中国を中心とするアジア向けの輸出回復を背景に総じて復調傾向を辿り、生産レベルはピーク比60～70%程度まで戻ってきている。しかし、足元の急激な円高の影響により、下期生産計画の下方修正を打ち出す需要家が現出するなど、需要の先行きに影を落とし始めている。一方、切板需要の過半を占める建設関連需要は、春頃から端境期に入っていた大型建築案件は、夏場を境にようやく切板発注が本格化するなど回復基調にあるが、中小建築・橋梁および一般店売り分野は落ち込みが激しく、惨憺たる状況が続いている。先行きについても、こうした中小建築・橋梁の長期低迷に加え、大型建築案件も年内ないし来年春頃まではハイレベルな発注が見込まれるが、その先の大型案件が全く見えず、不透明感が一段と強まっている。

こうした状況を反映して、切板需給は縮小したまま推移しており、依然リーマンショック直後の昨年レベルに復していない。

ちなみに、当組合が実施している月次調査により、直近5年間の1～7月計の状況を整理してみると、下表のとおりである。

直近5年間における受入・出荷のピークは、20年1～7月であるが、リーマンショック直後の21年1～7月は、ピーク比30%強減少した。その後も需要不振が続き、在庫調整を図ったこと等により、受入・出荷とも更に落ち込み、今年1～7月の状況は、最悪だった昨年同期のレベルをなお7～8%下回って推移している。賃加工量（工賃切り）が唯一増加傾向にあり、これが工場稼働維持に寄与している。

受入・出荷・賃加工の推移（1～7月計の比較）（単位：千トン）

	受入量	成品出荷	素材出荷	出荷計	賃加工
22年1~7月(A)	1,206	839	385	1,224	303
A/B (%)	92.8%	92.7%	88.1%	91.2%	189.4%
A/C (%)	61.4%	63.1%	58.5%	61.6%	144.3%
21年1~7月(B)	1,300	905	437	1,342	160
B/C (%)	66.2%	68.0%	66.4%	67.5%	76.2%
20年1~7月(C)	1,963	1,330	658	1,988	210
19年1~7月	1,898	1,234	652	1,886	241
18年1~7月	1,698	1,165	564	1,729	285

（出所）当組合「鋼板流通調査」

このため、全国各地のシャーからは、「良い材料は何もなく、まだまだこれからが厳しい」、「40%稼働でも何とか食いつなぎ乗り切るしかない」、「円高で下期以降仕事量が半減するところも」、「原料の値下がりでも下期以降の母材価格動向が焦点」、「母材価格は切り上がり、ユーザーの値下げ要求が強く、赤字経営続く」、「一度やめた雇用調整金を復活させるシャーも出ている」、「経営悪化で与信問題が一層深刻に」、「円高、人件費対策で、メーカーの海外移転、現地調達機運が高まっており、国内空洞化が心配」、「長期にわたる過当競争で疲弊し、深刻な事態になっている」、「一部鉄骨工事は電炉材・輸入材を容認している」、

「受注も少なく、切板価格も改善されず、体力消耗が続く」、等の意見が出され、3か月前に比べて、現状・先行きに対する不安の声が更に広がっている。

シャー各社の経営環境は、需要回復の展望が見えないまま、過去最悪の事態に直面している。

すなわち、①需要低迷に円高が更に追い打ちをかけていること、②母材のスケジュール値上げへの対応に追われ、その転嫁が進まないこと、③雇用問題、与信不安が一段と強まっていることなど、まさに閉塞状態である。

今後、シャーとしては、「仕事なき材料値上げ」の窮状をどう凌ぎ、体力の消耗をいかに食い止めるかが、最大の課題である。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建産機部門は、内需は相変わらず回復力に乏しいが、旺盛な新興国需要に牽引された外需に支えられ、機種毎の差異はあるが総じて生産は回復基調を辿っている。リーマンショック以降、各シャーは生産能力を大幅に削減したことから、足元の需要回復で稼働率としてもかなり高い水準まで戻り、フル稼働体制に入っているメーカーもある。しかし、急激な円高の影響が、現下の回復機運に水を差すことが考えられ、先行きが懸念される。

7月の建設機械の出荷額は、昨年著しい落ち込みの反動もあって、7ヵ月連続の増加となった。増産機種も、これまでショベル系のみであったが、鉱山機械が急回復するなど他機種にもプラスが拡大してきている。しかし重電は、足元の不振が22年度下期以降も続きそうである。原発は計画中の建設案件が多く、24年以降期待されるが、それ以外の分野は需要家の海外調達加速等により当面回復は望めない状況。

需要家は、為替リスクの回避やコスト削減策から、海外調達・生産拠点の海外シフトを一層加速させる方向にある。これに伴う国内空洞化による市場の縮小や原価低減要求への対応は、シャーにとって生き残りをかけた喫緊の課題となっている。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、21年度入札量が30万トン、22年度が20万トン程度と低レベルが見込まれ、年々先細りの傾向にある。このため、ファブの受注量は激減し、シャー切断量も足元、過去最低の水準まで落ち込んでおり、少なくとも年内は極めて厳しいレベルで推移するとみられる。また、下期の入札も11月頃から本格化するとみられるが、受注が決まっても切板加工が始まるのは年度末近くになり、今年度の数量は低水準となろう。

一方、首都圏の超高層建築案件は、これまでのところ中止延期等大きな計画変更もなく、高水準を維持している。8月から地上部の工事が本格化し、ファブの工場稼働は年内までフル状態が続く見込みである。しかし、足元で集中している大型案件以降の物件がなく、来年度はかなり厳しい状況になるものと予想される。

また、各地域とも期待の建築案件は動き出しているものの、中小建築案件が相変わらず

少ないため、回復実感に乏しく、コストダウン要求に苦慮している状況が続いている。

(3) 一般店売り分野については、設備投資関連や中小商業ビル等は、平成20年度下期以降ストップしたままであり、中小ファブの手持ち量は惨憺たる状況にある。各地区とも荷動きが低調で、超閑散の状態が続いている。シャーの稼働も50%以下の低操業を余儀なくされている。また市場では、母材価格が一物多価の様相を呈しており、受注・契約が複雑化している。

一方、母材供給面をみると、メーカー・ロールは、外需増大を主因に需給が引き締まり、タイトな状況が続いている。加えて、今後メーカーの設備休止等が伝えられおり、先行き納期遅延が懸念される。

全国各地の店売りマーケットは、高炉材と電炉材の2重価格で混乱し、需要家からの激しい値引き要求が相次ぎ、成約もままならない状況が続いている。

また、資源価格の高騰を背景に、今年度入り後、母材価格の大幅なスケジュール値上げが実施されているが、下期以降の高炉メーカーの価格政策がどうなるのか、最大の関心事になっている。

なお、シャー業界の当面する主要課題・関心事を列記すると、以下の通りである。

- ①母材価格3極化への対応
- ②適正加工賃の確保
- ③円高進行と国内空洞化
- ④雇用対策（助成金の申請、臨時休業、操業短縮等）
- ⑤与信管理
- ⑥コンプライアンス対応（品質証明、独禁法、輸送条件問題、等）。

※品質証明問題については、昨年12月に、「建築構造用鋼材の品質証明ガイドライン」がまとまり、以降、それをベースに、FAB・関係団体と具体的実行方策について協議中。

また、独禁法関連についても抵触しないよう適時組合員に周知している。

- ⑦建築分野におけるコンクリート、及び海外FABとの競合問題

### 3. 足元の主要需要部門の動き

#### (1) 橋梁・建築鉄骨の動向

##### 【全 体】

足元の状況は、橋梁の低迷と大型鉄骨案件の遅れから、一部を除きシャー各社とも極めて厳しい稼働状況となっている。しかし8月に入り、鋼材使用量の多い大型鉄骨の地上部が動き出したことから、鉄骨を主体とするシャーの稼働は改善しつつある。

今後の動向は、橋梁が下期も惨憺たる状況が続く見通しであるが、大型鉄骨案件の出件が

9月から年内にかけ集中しており、鉄骨比率の高いシャーはフル稼働状態になる見込み。

### 【橋 梁】

21年度の発注量が20万トン程度と低レベルにとどまることや、関東ファブがことごとく失注しており、各ファブの手持ち工事量は秋口までしかなく、それ以降は伸びていない。夏季休業も10～30日と従来にない長期間となった。その結果、7月以降の橋梁の切板発注量は激減しており、過去最低まで落ち込んでいる。少なくとも年内は足元の極めて厳しいレベルが続くとみられる。下期の入札も本格化するのには11月以降とみられ、仮に受注が決まっても、加工は早くて年度末近くになる見込み。今年度の数量は極めて厳しい。

### 【鉄 骨】

設備投資関連や中小建築案件の中止により、中小ファブの稼働は惨憺たる状況にある。

一方、超高層ビル案件は、今のところ大きな計画変更は見られず、Sファブ対象案件は高水準に推移している。

4月から本格化した地下部に続き、8月からは地上部が本格化しており、関東Sファブ各社の工場稼働は8月から年内にかけフル稼働が続く見込み。

年明け以降は、ファブによってやや差があり、急減するところと、年度内または23年度1Q頃まで高水準が続くところが出る模様。

いずれにしても、足元で集中している大型案件以降の物件がなく、来年度以降は極めて厳しい状況となる見込み。

## (2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

### 【全体】

各社の取扱い機種によって受注量の違いが顕著であり、足元の景況感はまだら模様の状態が続いている。今後については、外需主体で生産が回復基調にある分野も、急激な円高で、受注の減少や採算悪化による減産実施などの影響が出始めており、先行きへの不安が深刻化してきている。

### 【建設機械】

建設機械の7月出荷額（日本建設機械工業会調査）は、前年比+103.8%で7ヵ月連続の増加。足元、中国での伸び率鈍化が懸念材料であるが、同工業会の需要予測では、今年度は前年度比+41%とみており、この堅調さはしばらく続く見込みである。

#### 油圧ショベル

外需は、新興国向け輸出が絶好調、内需は中古機械市場の活性化と排ガス規制対策の買換えで緩やかな増加。シャーの受注は概ねピーク時の65%程度まで回復。

#### 建設用クレーン

全体に受注はピーク時の40%弱程度にとどまる。クローラクレーンは低迷が長期化し

ているが、北米および国内在庫はほぼ調整に目途が立ち、来年度からは実販レベルでの生産に移行する見込み。ラフテレーンクレーンは販売低調により、下期以降の増産計画をほぼ横ばいに下方修正。

#### 鉱山機械

世界的な資源需要の回復から鉱山機械の輸出は大型機種を中心に急回復。鉱山用ダンプだけでなく、大型ショベル・ホイローダまで波及。この急増を背景に、一部関係シャーはユーザーから増産体制確立の要請を受け、その対応に苦慮している。

#### 【板金・鍛圧機械】

板金機械は、輸出が堅調で、前年比倍増が続いている。22年度の受注予測では、ピーク比70%程度が見込まれており、回復基調が鮮明になりつつある。

プレス機械は、超大型プレスの伸長が著しく、その他も小型から大型・油圧まで回復（日本鍛圧機械工業会）。この回復は驚異的であり、機械導入の引き合いが着実に増加している模様。小型は液晶など電子部品向けの需要が増加。

#### 【重電】

重電は、今年度上期中の低迷が予想されていたが、足元の情勢ではさらに長期化しそうである。原発以外の受注が低調であることや、海外調達の加速が落ち込みの一因となっている。原発は、計画中の建設案件が多く、24年度以降への期待大。

#### 【産機店売り】

産機店売りでは、一般店売り・中小建材シャーと同様で、超閑散状態が続いている。素材価格の高炉・電炉二極化も受注瀬谷区を複雑化させており、又この分野でも円高の影響を受け、輸入材に切り替えられたとの話もある。受注低迷の長期化と低価格受注により、体力消耗が続く深刻な状態である。

#### 【参考】 成品切板の最終用途比率（平成21年3月出荷分。厚板シャー工組調べ）

・ 建築用：	37%
・ 土木用（橋梁、鉄塔等）：	17%
・ 建産機用：	26%
・ 輸送機用（船舶、自動車）：	8%
・ 重電用：	2%
・ その他（鉄道車両、容器、二次製品）	10%

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H22. 9. 14)

組合員の厚中板在庫推移(165社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	21/9末	12月末	22/3末	6月末	9月末	12月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	406	365	328	328	310	300
前期比/量	▲94	▲41	▲37	0	▲18	▲10
前期比/%	81.2	89.9	89.9	100.0	94.5	96.8

【コメント】

- 在庫量は、21年3月末(551千トン)をピークに漸減傾向をたどり、22年3月末は328千トンで、ピークに比べて223千トンの削減が図られたが、本年5月以降は、一進一退の状況が続いている。
- 在庫率も、需要低迷下、仕入れ削減による在庫調整が進み、22年2月末197%、3月末170%、4月末188%と低下した。5月末は201%まで上昇したが、その後はほぼ適正在庫率(200%以下)の範囲内で推移している。ただし地方圏の在庫率は総じて高止まり状態にある。
- 今後の在庫状況については、需要不振のさらなる長期化を想定すると、シヤ業者の慎重な母材申込み姿勢と、メーカー・ロールの状況に左右されることになる。この2つの要因を勘案すると、7月～8月末と34万トン台で推移している在庫は、9月末には、310千トン程度に、12月末には300千トン程度と、年末に向かい漸次減少するものと期待される。
- 在庫率も、今後、月間出荷量が1～7月平均の17～18万トンレベルで推移すると仮定すれば、9月末在庫率は172～182%、12月末は167～176%程度と推計され、適正レベル内で推移すると予想される。
- 当分の間需要低迷が続くと思われるので、今後とも在庫管理には細心の注意が必要である。

以上